

ベスト1映画にこだわって

上原 昇（2組）

8月連休明けの12日の午後、残暑厳しい雨模様のなか、渋谷まで出かけた。

名画座、シネマヴェーラ渋谷で「羽仁進レトロスペクティブ」特集、1961（昭和36）年の邦画ベスト1作品『不良少年』（岩波映画製作所製作、新東宝配給）を観るためだ。

週刊文春（8/14,21 夏の特大号）、「傑作発見！黄金の日本映画」欄で映画研究者の北村匡平氏が“羽仁進の革新的演出術が光る「不良少年」”と絶賛している。

羽仁進と言っても who? という諸兄も多いかと。著名な左翼系歴史家の羽仁五郎と婦人運動家の羽仁説子の長男として生まれ、数々のドキュメンタリーや劇映画話題作を世に送ってきた映画監督である。元妻は演技派女優の故左幸子。1928年生まれで今年96歳になるが、存命というから驚いた。

本作は60数年前に上映されているが今観ても全く色褪せていない。劇映画だが、演ずる主人公たちは、皆、俳優経験はなく非行経験のある少年たちで、ドキュメンタリータッチの生々しい迫力を再現している。



映画『不良少年』ポスター

映画好きを自称している筆者だが、映画鑑賞に際してこだわっていることがある。

キネ旬選出の歴代ベスト1映画を出来る限り映画館で鑑賞すること。

日本一の歴史を誇る映画雑誌「キネマ旬報」のベスト10は1924（大正13）年の洋画から始まっている。邦画のベスト10は1926年からである。戦時中の1943年から45年は選出中止。その後、1946年から現在に至るまで続いて、昨年でちょうど100年を数えた。

筆者の映画鑑賞記録では邦画はこれまでの年間ベスト1作品96本中、86本を映画館で観ている。洋画は96本中、68本を見ていて、28本が未鑑賞である。

邦画については、筆者が生まれた1948（昭和23）

年から昨年（2024年）までの76年間のベスト1作品中、まだ鑑賞していない2作は少なくとも観ておきたい。因みにその2作とは『月はどっちに出ている』（1993年、崔洋一監督）と『映画 夜空はいつでも最高密度の青空だ』（2017年、石井裕也監督）。

洋画についてもベスト1上映の機会を目にしたら、体力の続く限り映画館に足を運びたい。

ベスト1の歴史をみていると、面白いことに気づかされる。

歴代の名画の中でも大傑作として国内外で評価が高い作品が必ずしもその年のベスト1に選出されていない。例えば、小津安二郎監督の『東京物語』は1953年のベスト2位。黒澤明監督の『七人の侍』は1954年のベスト3位といった具合である。

前記の『不良少年』も同じ年に黒澤明の『用心棒』とか小林正樹の『人間の条件（完結篇）』など話題作が並んだが、キネマ旬報評によると「とんだ伏兵があらわれた。羽仁進が初の長編劇映画『不良少年』を撮って、あっという間に1位をさらってしまった」のである。

その時の評価と後世の評価とはかならずしも同じではないということであろう。

家人は「他人の評価でどうこうするのはおかしい」と言うが、残り少なくなった人生でこだわりを持って動くのも有りかなと思っている昨今である。

雨の渋谷の雑踏のなか、満足して家路を急いだ。

（2025年8月12日記）

以上